

「実利論—古代インドの帝王学—」 上・下巻

カウティリヤ(著) 上村勝彦(訳)

岩波書店 1984年9月17日刊

郵政民営化法案を参議院で否決されたことを受けて、小泉純一郎首相は衆議院を解散して総選挙を実施することを決めた。それに際して、自民党は民営化に反対した候補を公認しないばかりか、反対者のいる選挙区には賛成派の対立候補を立てるといった追い打ち的な策を打ち出している。このような小泉首相の態度に対して、「非情」であるとか、「やりすぎ」であるという意見も出ている。

今回は、マックス・ウェーバーが『職業としての政治』の中で、「インドの倫理では、政治の固有法則にもっぱら従うどころか、これをとことんまで強調した—まったく仮借ない—政治技術の見方が可能となった。(中略)インドの文献の中ではカウティリヤの『実利論』に典型的に表れている。これに比べればマキャベリの『君主論』などたわいのないものである。」と述べている、この『実利論』を紹介することで、政治のリアリティについて考えてみたい。

本書は紀元前4世紀にマウリア朝のチャンドラグプタに宰相として仕えたカウティリヤの作とされている。内容は単に政治だけでなく、現代で言えば、商法、民法、刑法、経済学、軍事学、外交、学術に関する広範な事項に及び、それに一貫した視点を与えている。

そもそも古代インドにおいては、法(ダルマ)、実利(アルタ)、享楽(カーマ)が人間の3大目的であるとされており、本書の作者といわれるカウティリヤは、実利がとりわけ重要であると考えていた。その名が示すとおり、実利として、王が学ぶべき学問、精神修養、各行政官に求められる資質、刑法や訴訟手続き、犯罪者に対する量刑などが極めて具体的に教示されている。

王はスパイを派遣して、潜在的に謀反を企てる内外の者を事前に掌握し、危険から自己を守るべきであることが説かれている。その諜報活動や刺客による暗殺方法の具体性には驚かざるを得ない。

しかし、本書の中心的なメッセージは権謀術数にあるのではなく、「国王は国民の安寧を守るために、精励努力して実利を追求すべきである。見寄りのない小児、老人、被災者、婦人などの弱者を守るためには社会的秩序が必要であり、そのためには揺るぎない権力が必要である。」ということに尽きる。

国民の安寧や弱者の保護に結びつかない国内の政争や権謀術数は不毛であるばかりか有害でもある。今回の総選挙も、国民生活に安定をもたらすような政権の選択と、そのための政策論争を中心としたものに軸を移すべきである。選挙民の求めている政治的リアリティはそこにしか無い。